みんなで考える、これからの放課後。

放課後マガジン

【対談】
**子どもの育ちに必要な
より良い放課後の時間とは？**
～ウェルビーイングってなんだろう～

【座談会】放課後に関わるプロが考える
**“こどもまんなか”の
放課後のつくり方**

子どもの声に寄り添う
**“こどもまんなか”の
放課後づくりに向けて**

Vol.3
2024
APRIL

特集

ここに居たいと思える場所であるために

子どもと共につくる、つながる放課後

放課後マガジン Vol.3 2024. APRIL
編集・発行：特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール
〒113-0033 東京都文京区本郷1-20-9 本郷元町ビル5F TEL：03-6721-5043（代）

INFORMATION

放課後NPOアフタースクールからのお知らせ

アンケート　皆様の声をお聞かせください！

『放課後マガジンVol.3』を手にとっていただき、ありがとうございました。
冊子・記事内容について、ぜひご意見をお聞かせください。
ご回答いただいた方には、今後、弊団体が開催するイベント・勉強会のお知らせをお送りいたします！さらに、今回は2024年3月に開催した実務者向け研修「放課後勉強会」のアーカイブ映像もお送りいたします。

- **今後取り上げてほしいテーマ**
- **気になる自治体の取り組みや、取材してほしい自治体の取り組み（自薦他薦問わず）**

アンケートフォーム

● **アンケートフォーム：**https://forms.office.com/r/DWQxH3Qp1X

お知らせ　自治体向けオンラインフォーラムを開催いたします。

テーマ：「自治体のこども計画策定とこどもの意見反映～放課後の居場所づくりはどう変わる?～（仮）」
日時：2024年5月30日（木）10:30 - 12:00　オンライン開催・無料　※アーカイブ配信あり

2023年末に決定した「こども大綱」を受け、今後各自治体には「こども計画」策定と子どもの意見反映が求められており、それらをどのように進めればよいかのヒントを得られるイベントを開催します。
前半は、国のガイドラインについての説明と自治体の先行事例を紹介。後半は、放課後の居場所づくりをこども計画にどう位置づけ、子どもの声をどう反映していくかについてディスカッションします。

[登壇者]
・こども家庭庁 長官官房（総合政策担当）参事官 佐藤勇輔氏
・滋賀県こども・若者部 こども若者政策・私学振興課（登壇者調整中）
・神奈川県 川崎市 生涯学習部 地域教育推進課（登壇者調整中）
・兵庫県 南あわじ市 市長 守本憲弘 氏
[ファシリテーター] 放課後NPOアフタースクール 代表理事 平岩国泰
※内容は変更となる可能性がございます。詳細は4月中旬にHP・SNS・メール等でご案内予定です。

● **お申し込みはこちら：**https://npoafterschool.org/archives/news/2024/03/41281/

お申し込み

「放課後マガジン」は2024年度も公式noteで継続します！

2023年より3回、全国の自治体の皆様に向けて冊子の発行を行ってまいりましたが、今後は放課後NPOアフタースクールの公式noteを中心に展開してまいります。
不定期で冊子のお届けもまたできればと考えておりますが、ぜひ最新情報は右の二次元バーコードからnoteをフォローいただき、お読みいただけましたら幸いです。
これからも皆様のお役に立てる放課後情報を発信していきたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします！

詳細はこちらから

放課後NPO アフタースクール
編集・発行：特定非営利活動法人 放課後NPO アフタースクール
助成：公益財団法人 日本財団

〒113-0033 東京都文京区本郷1-20-9 本郷元町ビル5F
TEL：03-6721-5043（代）　/　Eメール：kaihatsu@npoafterschool.org

制作協力：株式会社都恋堂
※本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。
本冊子は、日本財団様の助成により作成しています。
Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

子どもと共につくる、つながる放課後

大人の都合で行かされる場所ではなく、
子どもたちが自らそこに居たいと思える場所であるために――。
今号は、“こどもまんなか”の放課後のカタチについて考えます。

対談　石川善樹さん × 平岩国泰さん

子どもの育ちに必要な より良い放課後の時間とは？
～ウェルビーイングってなんだろう～

子どもたちにとって「放課後」という場はどうあるといいのでしょうか。医学博士の石川善樹さんに放課後NPOアフタースクール代表理事・平岩国泰がお話をうかがいました。

石川善樹
（いしかわ よしき）
1981年広島県生まれ。公益財団法人Wellbeing for Planet Earth代表理事。「人がよく生きる（Good Life）とは何か」をテーマに企業や大学と学際的研究を行う。

平岩国泰
（ひらいわくにやす）
1974年東京都生まれ。長女の誕生をきっかけに、2004年「放課後NPOアフタースクール」の活動開始。2019年新渡戸文化学園理事長に就任。

子どもの育ちに必要なものとは？

平岩：2023年6月に閣議決定された「教育振興基本計画」にウェルビーイングの観点が盛り込まれて話題になりました。あらためてウェルビーイングとは何でしょうか。

石川：ウェルビーイングというと、これまでは教育・健康・資産の豊かさに関する客観的ウェルビーイングが中心でした。しかし、昨今では「本人がどう感じているか」に比重を置く、「主観的ウェルビーイング」が注目されています。

平岩：「教育」の計画や目標には、学力を中心として、客観的に測られるものが記載されることがほとんどでしたが、今回、主観的な感覚でもあるウェルビーイングが入ったことはとても印象的でした。子どもたちのウェルビーイング向上にはどんなことが大切なのでしょうか。

石川：まず考えられるのは、居場所の数と質です。これらが増えるほど、ウェルビーイングのみならず自己肯定感やチャレンジ精神、社会貢献意欲などが高まるというデータがあります。そうした意味でも、学校や放課後は、子どもたちにとって大切な居場所になります。

放課後の時間はなぜ必要なのか

石川：居場所という点でいえば、放課後の体験格差がウェルビーイングだけでなく、学力格差にも結びついていることがわかってきています。そこで最近では、放課後の時間を充実させることに関心が寄せられています。

平岩：私たちの放課後の活動は、まさに居場所づくりそのものといえます。さらに、その質を高めていくために「〝ありのまま〟の自分でいられること」「自分で選んで決められる〝自己決定〟」「人への〝貢献〟」「〝伴走者〟の存在」という、4つのキーワードを大切にしています。

学校より放課後が好きだという男の子との印象的なエピソードがあるのですが、彼は電車が好きで、鉄道写真を1万枚以上も撮りためていたことから、放課後のスタッフの提案で電車の写真の展覧会をすることになりました。人生初の個展です。選び抜かれた12枚の写真が飾られた展覧会には、近所の幼稚園児がやってきて、とても喜んでくれました。その体験をきっかけに彼は、今まで誰かに何かをしてもらうばかりだったのが、「自分も誰かに何かできる」ことに気づき、いろいろなことが好転していきました。

こうした出来事は、まわりから見れば小さな一歩かもしれません。しかし、子どもにとってはとても大きな一歩だということを、あらためて気づかされました。

石川：ウェルビーイング研究では「健全な多重人格」が重要なキーワードです。人には、自分が何者かになれる場所だけでなく、何者でもない自分でいられる場所も欠かせません。様々なグラデーションの自分でいられる場所があって、どこかに必ず自分の居場所があると思えることが大切です。何もしなくてもいいし、昼寝したかったらしてもいいという、アフタースクールで過ごせるような放課後の時間こそが、本当に必要というわけです。

平岩：確かに、子どもたちにとってはバランスが大切ですね。その結果として、「何者でなくてもいい」という感覚が持てたらいいですよね。

まずは子どもの声に耳を傾ける

平岩：より良い放課後をつくるために、まず何から始めるのがいいと思いますか。

石川：最終的に子どもたちがどんな状態になってほしいのか、全国共通の物差しをもつことが、やはり必要だと思います。また、社会は世代交代を経て30年もあれば変わっていきます。例えば、家庭科の授業は子どものウェルビーイング向上に果たす役割が大きいと言われていて、最近の若い男性が家事や育児に積極的なのは、1994年から家庭科の授業を男女一緒に行うようになった成果だという研究結果も出ています。つまり、人の考え方が変われば社会も変わるわけで、長いスパンでの変化を見すえながら、子どもたちとじっくり向き合う姿勢が大事です。そのためにもまずは子どもたちの声に耳を傾け、しっかりデータをとったうえで、知見の共有化を進めることから始められるといいですよね。

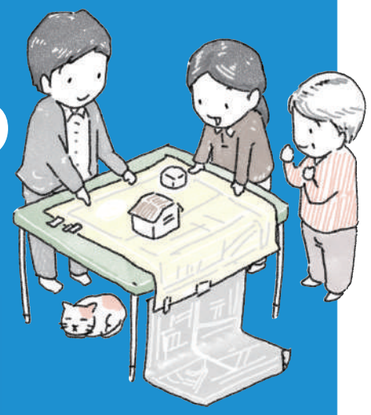
平岩：子どもたちの声を聴くことは、本当に大切な第一歩だと思います。石川さんのお話をうかがっていて、放課後という時間がウェルビーイングに寄与できていることをあらためて実感できました。先生たちは、学校でウェルビーイングを実現しなければ！と気負い過ぎずに、放課後という味方がいることを忘れないでほしいと思います。行政の皆さんは、ぜひ放課後も含めたウェルビーイングの計画設計をお勧めいたします。私たちはこれからも親子に寄り添いながら、すべての子どもたちに豊かな放課後の扉を開けるよう活動を継続していきたいです。

この記事の詳細レポートは以下の二次元バーコードから！

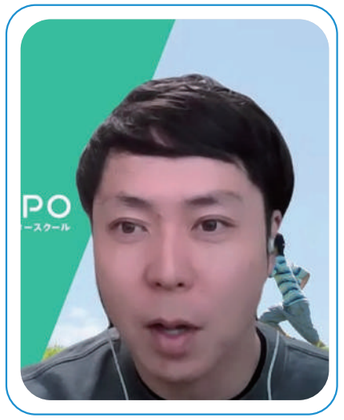
座談会

放課後に関わるプロが考える

“こどもまんなか”の放課後のつくり方



子どもが社会のまんなかで自分らしく生きるために、放課後に今、何が求められているのでしょうか。放課後に関わる様々な領域のプロが語り合います。



渡部 岳さん

放課後NPOアフタースクール

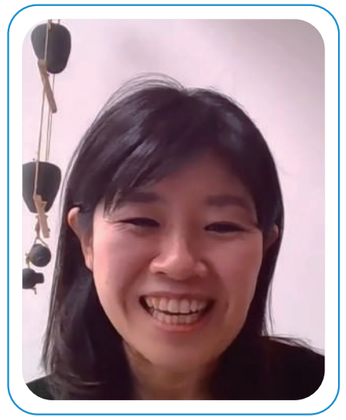
教職員を経て入職後、公立アフタースクールの現場運営に携わる。現在は、自治体や運営事業者と連携して全国の放課後活性化に取り組んでいる。

飯村 樹里さん

ソニーグループ株式会社

サステナビリティ推進部

「感動体験プログラム」の実施責任者として、パートナーとの協働のもと子どもたちの体験格差縮小に取り組む。



須賀田 真理さん

臨床心理士・公認心理師

放課後NPOアフタースクールが運営する公立小学校の放課後児童クラブに巡回相談心理士として参画。巡回訪問やスタッフ、保護者との面談を行う。

放課後をデザートみたいな楽しみな時間に

渡部さん：放課後ってデザートみたいな時間だと思います。子どもにとって楽しみな時間であってほしいし、そのためには大人も楽しめていることが大切です。そんな思いから、僕は全国にいる現場運営者のみなさんをサポートしています。須賀田さんのような心理職の方が学校ではなく放課後に関わってくださることはとても珍しいと思うのですが、どんなモチベーションで関わってくださっているんですか。

須賀田さん：学校ですごく頑張った子たちが、思いっきり弾けて楽しんで、自分らしく過ごすことができる。放課後とはそういう時間ですよね。その一方で、子どもにとってはストレスを発散できる時間でもあり、スタッフのみなさんが関わり方に悩むこともあります。心理士として何か力になれることがあればお手伝いしたいと思い、月2回、放課後児童クラブへの巡回訪問を続けています。

飯村さん：放課後の時間は学校よりも圧倒的に長くていろいろなことができるのですが、子どもたちの間に、経済格差や地域格差からくる体験格差が生じているという現実もあります。そこにどうアプローチできるかを考え、ソニーグループのテクノロジーとエンタテインメントを活用した「感動体験プログラム」が生まれました。プログラムを通じて子どもたちの好奇心や創造性を育む体験を提供することが、私たちの大きなモチベーションになっています。

子どもたちとどう関わる？日々の悩みも

渡部さん：自分らしくいられる自由な放課後づくりに挑戦する過程で、スタッフ側に「どの程度子どもの自由を尊重すべきか？」という悩みが生まれてきます。ある現場で自由というよりも秩序が崩れてしまいそうだったところ、スタッフが何を思ったか廊下で地域の踊りの音楽をかけ始めました。すると大人も子どももみんなで踊り始めて、それが子どもたちにすごくはまりました。それまで言うことを聞かせようと頑張っていたスタッフが「子どもと一緒にやってみよう」と発想を切り替えたときに、子どもたちがぱっとこちらを向いてくれた。その瞬間を目撃できたのはとても嬉しかったですね。

須賀田さん：まず大人が変わる、というのは大切ですね。以前、学校でなかなか集団に馴染めず、ストレスで暴言が出てしまう子がいて、スタッフさんが対応に悩んでいた、ということがありました。暴言を制止するよりは、「どうしたの？」とできるだけ寄り添い、その子の話をたくさん聴いてあげるようにしていこうと決めて関わっていただいたところ、どんどん落ち着いていって、スタッフさんとも友達ともいい形で関われるように変化した、ということがありました。スタッフさんたちにとって「関わり方でこんなに子どもが変わるんだ」と体感できた出来事になりました。

国内の体験格差縮小を目指すソニーの「感動体験プログラム」

大人の協働で体験機会を増やす

渡部さん：ある現場に地域の方がプログラミングを教えに来てくれたことがあったのですが、その中に一人、学校でいろいろあってイライラしている子がいました。最初、その子は活動に加わっていなかったのですが、講師の方の荷物を運ぶのをちょっと手伝ってもらったのをきっかけに、機材のコードをつないだりと、まるでお弟子さんのように楽しそうに動いていました。その子には、そこが居心地良かったんですよね。本当はもっとそういう体験をたくさん用意してあげたいのですが、限られたリソースの中ではやりきれないのが現実です。ですから、ソニーさんのような形で協働いただけるのが本当に心強いです。

飯村さん：体験が子どもを変える、というのは本当にいつも実感しています。以前、不登校傾向があるお子さんがワークショップに参加してくれていたのですが、発表会のときにいらした教頭先生が、「学校とはまったく違う、イキイキとした表情だった」と大変驚かれていたことがありました。こうした子どもたちの変化をデータとしても把握したいと思い、体験機会の提供による子どもの非認知能力向上について社会的インパクト評価を実施した結果、長期の体験プログラムに参加した子どもたちの非認知能力が段階的に上昇することが確認できました。以前から現場で感じていた子どもたちの成長を数値としても捉えられたのは、嬉しいですね。

ソニーのアセットを活用し、STEAM領域の多様なワークショップを実施している

これからの放課後づくりに向けて

渡部さん：「こどもまんなか」は社会全体で取り組むべきテーマだと思いますが、それに関わる大人もまんなかでいてほしいです。そばにいる大人も心地良く、子どものやることを笑って見守ることができるような余裕を持てるよう、サポートを続けていきたいです。

須賀田さん：巡回訪問を続けた4年の間に子どもも保護者も少しずつ変化した例もありました。「こどもまんなか」のために、時には保護者へのサポートも大切です。保護者が自分を主語にして相談できる場はまだ少ないので、今後もお役に立てればと思っています。

飯村さん：私たちのワークショップにはいわゆる正解はありません。正解のない問いに対し、子どもたちは自ら考えて作品を作ったり、自分の考えを伝えたりしていく。そうした体験を通じて、子どもたちが視野を広げ、感性を磨く時間を今後も提供していきたいです。

“こどもまんなか”の放課後のために、何ができるだろうか

この記事の詳細レポートは以下の二次元バーコードから！

子どもの声に寄り添う

“こどもまんなか”の放課後づくりに向けて

“こどもまんなか”の放課後を実現するために大切なこととは――。国の方針や自治体の取り組み、調査により見えてきた子どもたちの実態から考えます。

国の動き・ここに注目！

- **Point 1** 子どもの声を聴き、対話しながら共に進めることが重要
- **Point 2** 「居たい」「行きたい」「やってみたい」に応じた多様な居場所づくりが必要
- **Point 3** 自治体こども計画策定に向け、国もガイドライン等で支援
- **Point 4** 福祉部局と教育部局などの連携が重要

国のこども施策と基本方針

国では昨年12月に、こども基本法に基づく初の「こども大綱」を決定。全ての子ども・若者が身体的・精神的・社会的に幸せな状態（ウェルビーイング）で生活を送ることができる「こどもまんなか社会」を目指していくことが示されました。

こども大綱の6つの基本的な方針の中で注目したいのが、「こどもや若者、子育て当事者の視点を尊重し、その意見を聴き、対話しながら、ともに進めていく」こと。

こども大綱と同時に決定された「こどもの居場所づくりに関する指針」でも、一人ひとりの「居たい」「行きたい」「やってみたい」に応じた居場所を、子どもと共につくっていくことが求められています。

ある場所を居場所と感じるかどうかは子ども・若者本人が決めるものである一方、居場所づくりは大人などの第三者が行うもの。そのギャップを乗り越えるためには、子どもの視点に立って、子どもの声を聴き、共につくっていくことが重要といいます。

さらに昨年末には、令和5～6年度に集中的に取り組むべき放課後児童対策をまとめた「放課後児童対策パッケージ」も公表されました。1・52万人分の放課後児童クラブの受け皿整備に向け、場や人材の確保、適切なマッチングなどを進めるほか、全ての子どもにとって安全・安心な居場所を確保することの重要性が示され、コーディネーターなどの人材確保、学校や児童館、地域での多様な居場所づくり、質の向上に向けた研修の充実などが盛り込まれました。

今後は、こども大綱を踏まえて自治体こども計画の策定が進められ、国もガイドラインの作成や策定経費の補助などによる支援をしています。

子どもの居場所づくりや放課後児童対策を考えるうえで、ポイントとなるのが関係部局間の連携。とりわけ、福祉部局と教育部局の連携が重要とされています。

学校で過ごす時間も放課後の時間も、どちらも同じひとりの子どもをかたちづくる大切な時間。子どもが幸せな状態でいられるために何が必要か、子どもの視点に立ち返って考えることで、大人同士の連携のあり方も見つかるかもしれません。

自治体における「こどもの意見反映」どう進める？

推進体制は？―滋賀県子ども・青少年局　大橋雄一さん

滋賀県では「（仮称）滋賀県子ども基本条例」を検討中。検討は「滋賀県子ども若者審議会」で行い、高校生や大学生も委員として参画。また、こども計画の検討過程では同審議会の4分野の検討部会とそれらを横断して子どもの意見反映を担う「子ども真ん中企画検討部会」が連携する体制で意見反映を推進します。

聴き方は？―近江八幡市子育て支援課　北川雄貴さん

滋賀県近江八幡市では、こども家庭庁「こども・若者意見反映サポート事業」を活用し、放課後児童クラブにおいて子どもの意見聴取を実施。派遣されたファシリテーターにより丁寧なアイスブレイクの後、答えやすい質問から徐々に掘り下げていくなどの工夫も。子どもの声には「スケジュールを自分たちで決めたい」など、過ごし方や環境、支援員に対するものがあり、今後運営への反映やフィードバック方法を検討します。

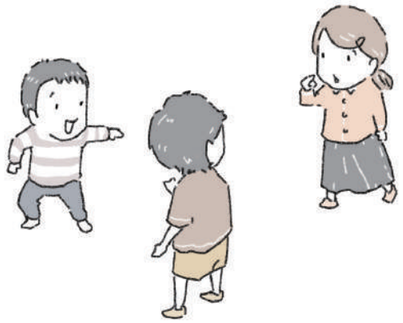
詳細は以下の二次元バーコードから！

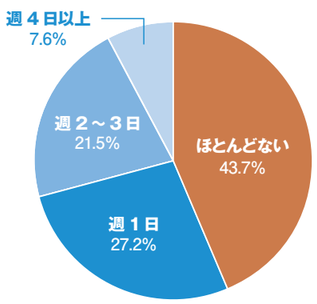
独自調査から見えてきた子どもたちのリアル

2023年8～9月にかけて、放課後NPOアフタースクールでは、小学生の放課後の過ごし方に関する独自調査を実施しました。その結果、76・2％の小学生が「放課後にもっと友達と遊びたい」と回答したのに対して、友達と遊ぶのは「週1回以下」が70・9％となりました。

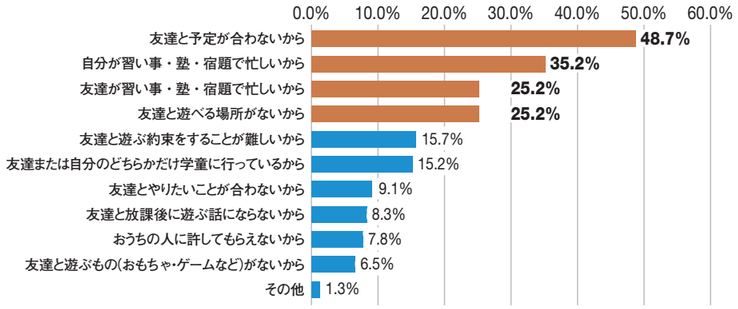
「どうして放課後に思っているように友達と遊べないのか」という問いに対しては「友達と予定が合わないから（48・7％）」がトップ、次いで「自分が習い事・塾・宿題で忙しいから（35・2％）」と回答。小学生とその保護者に対するフォーカスインタビューで思うように遊べない理由を聞いたところ、子どもからは「習い事や宿題で時間がないから遊べない」、「自分も友達も習い事があって予定が合わないことも多い」、「友達が学童をやめちゃった（から一緒に遊べない）」、「公園が近くにない」といった、時間・仲間・空間の「3つの間」に課題があることがうかがえました。

保護者からは「子どもの遊び場がとにかく少ない」、「公園はあるけど子どもが遊べるように整備されていなくて、危なくて遊べない」など、子ども同士で安全に遊べる場が少ないという声が聞かれました。また「校庭開放はあるが、一度家に帰ってから遊びに行くルール。家と学校が遠いから遊びに行かない」、「ドッジボールを楽しみに児童館に行っていたけど、職員さんにドッジボールを禁止されてから行かなくなった」、「学童の支援員不足で目の前の公園にも行けない」など、遊び場のルールや人・環境による制約のため思うように遊べない場合もあることがうかがえます。





放課後にどれぐらい友達と遊んでいますか？



どうして放課後に思っているように友達と遊べないと思いますか？

いま、地域と自治体ができることとは？

2023年11月、放課後NPOアフタースクールでは「こどもまんなかでつなぐ学校と放課後」と題したオンラインフォーラムを開催しました。第1部ではこども家庭庁が目指す「こどもまんなか社会のありかた」や日本の小学生の現状、海外の放課後について、第2部では東京都三鷹市と北海道安平町での学校活用と地域連携の実践例についてゲストの方々にお話しいただき、それぞれで弊団体代表理事の平岩国泰とパネルトークを実施。多様な視点から「こどもまんなか」の実現に向けて意見を交わしました。

前述の独自調査結果なども紹介し、子どもたちがもっと自由に遊べる場所の一つとして学校活用にも注目が集まりました。こども家庭庁成育環境課長の山口正行氏からは、「こどもたちにとっては同じ学校の中で放課後の居場所があれば一番安全です。でも学校によっては余裕教室がなくなってきたり、管理や責任の問題、学校の先生の働き方の課題などもあり、なかなか学校施設の活用がうまくいっていないところもあるのだろうと思います。そうは言ってもやはり同じ地域のこどもですので、『地域のこどもをどうみんなで育てていくのか』という観点で、学校と教育委員会、また市町村の福祉部局がしっかり連携をしてやっていくことが必要だと考えています」という意見も述べられました。また日本総合研究所調査部上席主任研究員の池本美香氏は、「日本では、親のために保育時間をいかに延長するかという方向が強いのですが、海外では〝子どものための〟放課後のあり方を考える動きが目立ちます。親の就労に関わらず利用できるのも一般的ですし、子どもの意見がとても大事にされていて、子どもたちがルール作りをする場合もあります」とお話ししてくださいました。

放課後NPOアフタースクールでは、今後もこうした実態調査やイベント開催などを通じて小学生の放課後の現状と子どもの願いを社会に発信し、日本の放課後が子どもの視点に立った仕組み・環境へと進化していくことに寄与してまいります。

この記事の詳細レポートは以下の二次元バーコードから！